

ミャンマー、アマラプラにおける繊維織物産業について

ミャンマーは繊維織物産業では古い歴史があります。マンダレー管区のアマラプラ（Amarapura Township）はこの地区において、高品質の絹、綿製品の輸出に係わる重要な産業ハブとしての役割を担ってきました。そのほとんどが昔からこの土地で服飾、ロンジーの生産をしてきた中小製造業者や小売業者です。職人も含めると従業員は総勢5人から75人程度の規模が多く、工場と直営販売店を置くスタイルで運営されています。



織物職人は企業に入りながら熟練をしていくケースが多いですが、アマラプラには織物訓練機関が存在します。サウンダー（Saunder）織物訓練機関（SWS）です。ミャンマー商業省より「ハンドメイド・テキスタイルデザインの向上セミナー」の講師として招かれたジャスマリー社長・大倉紀子専門家、商業省の職員らと3度目の訪問を果たしました。SWSは織機訓練学校として1914年イギリス人 Mr. L. H. Saunder によって創設され、2代目はインド人が経営し、3代目からはミャンマー人の校長がその運営を引継ぎ現在では13代目の校長となっています。100年近くアマラプラの繊維産業に卒業生を排出し産業を支え続けてきたSWSは援助省中小産業局よりサウンダー職業訓練機関となることが承認され、さらに、2014年にはUNDPより能力査定の特任機関とされました。

日本アセアンセンターでもまた、2013年から大倉専門家を派遣し日本市場にむけてのプロダクトデザイン改善のための支援を行いました。その結果、当該職業訓練機関において訓練生が生産する作品は、市場商品としての価値を生み出し試作品のレベルを超えて海外へも輸出されるまでとなりました。日本でも毎年、東京ビッグサイトで開催さえる国際ギフトショーにその商品は展示されています。

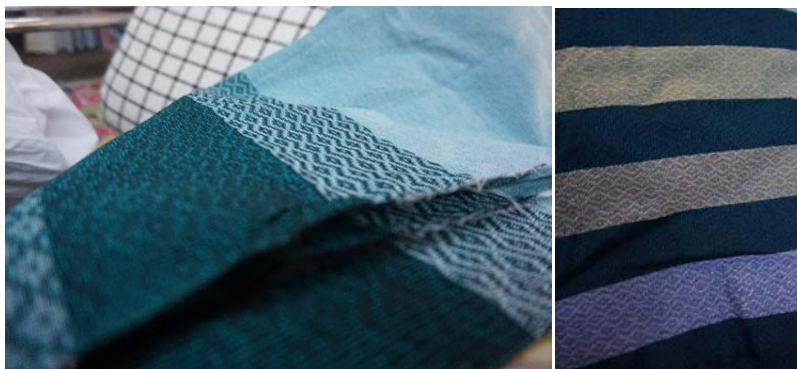
今回の「ハンドメイド・テキスタイルデザインの向上セミナー」に、Tint Tint 校長と2名の教師が出席し、国際市場競争力向上にむけて、生産性と品質改良の為の講義を熱心に聴講していました。



ミャンマーの伝統的衣のロンジーと上着のエンジーのほとんどがアマラプラで生産され、国内に流通しています。男性用平服ロンジーの典型は、写真左にあるように濃紺や緑またはえんじ色の格子パターンを基調としているものがほとんどです。定番が多い男性用に対して、女性用は流行に左右されることが多く、近年のトレンドは、パステルトーンの下地に鮮やかな糸による刺繍をほどこした柄が人気アイテムで祭事などに着用されます。



アウン・サン・スーチー国家顧問は、一時期ロンジー離れした国民にロンジーの着用を呼びかけました。国家顧問は地味で質素なロンジーを好みますが、彼女が着用したロンジーはたちまち国民の人気となるそうです。写真は、スーチー国家顧問が着用されたロンジーと同柄商品と色見本布です。



最近の女性に流行のロンジースタイルはモノトーンのドレスにシンプルな刺繍柄です。ロンジーとエンジー（上着）の組み合わせ、いわゆるツーピースという服装が一般的なのに対して、写真の女性たちはワンピースドレススタイルになっています。

他方、エンジー（上着）の方は透ける素材が流行で、オーガンジーやレース地で仕立てられています。



2013年の繊維織物業界においてミャンマーに進出している企業は100%直接投資か、ジョイントベンチャー企業で、その多くはヤンゴン市内、バゴーとエイヤワディ管区の特区にありました。しかし、アマラプラはミャンマーの繊維織物産業のlocal supply chainとなり得る拠点です。“made in Myanmar”ブランドとして世界に発信するプラットフォームとしての可能性を秘めていると言われています。

ミャンマー繊維製造協会（Myanmar Garment Manufacturers' Association・MGMA）の10年間戦略構築レポート（2015-2024）によると、「ミャンマーのローカルサプライチェーンについて次のように述べています。「ローカルサプライチェーンの発展は具体的な商品構造を促進することで地方産業の必然性を増し、その結果 輸入品目を減らし地方市場の活性化を促進させる」。また、ミャンマー繊維製造協会（MGMA）は他省庁、他機関等の関係者との連携を強調しており、ミャンマー商業省もミャンマー貿易促進委員会（MTDC）による国家輸出戦略（NES）実施にむけた技術支援を計画している、ということです。

こうしたアクションプランに基づく、ミャンマーの繊維織物産業に注目していきたく思います。